

# 大門坂

2月号 月田小学校だより

平成30年1月24日(水) 校長 小林幸雄

## 名文・詩文暗唱の奨め

### ～小さな極限の設定と成功体験～

突然、小さくドアをノックする音が聞こえます。ドアの向こうで「校長先生に用事があります。入ってもいいですか」という声が響きます。

名文・詩文の暗唱テストに挑戦してきた4年生の子どもたちです。

校長室での審査です。普段とは緊張の度合いが違います。でも、流暢によどみなく名文をそらんじてしまいます。恐らく、何度も声に出して読み、自信を深めて臨んできているのでしょう。ちなみに、この時の名文は、「我が輩は猫である」でした。

このような校長室の訪問は、昨年末、5年生から始まりました。最初は、女子2名に始まり、しばらくすると男女入り交じって、次々と校長室を訪れてきました。

名文・詩文を暗唱するには、集中力が必要です。暗唱が出来たとき、やればできるんだという自信が付きます。小さな達成感も味わいます。

これが、成功体験です。このようなことは、学習においてとても大切な要素です。

暗唱の良さは、それだけに留まりません。暗唱



山陽新聞さん太号来校 5年生・新聞づくりの学習

することを通じて脳が鍛えられるからです。

脳の発達とは、細胞間の回路が作られることですが、暗唱は、この回路を強化する役目を果たします。つまり、暗唱は脳を鍛えて地力を作り、脳のキャパを広げることに繋がるのです。

昨年の秋、逆上がりキャンペーンを実施しました。小さな極限を設定し、それを乗り越える成功体験を積ませるためのキャンペーンでした。

名文・詩文の暗唱は、これと同じです。

先に述べたように長文の名文・詩文を暗唱することは簡単には行きません。これが小さな極限の設定です。ぎゅっと集中して覚えようとする努力が必要です。

何度も声に出して読み、名文を暗唱できたとき、「僕は、こんなに長い文を…、私は、こんなに難しい文を暗唱できたんだ…」という自信にも繋がるのです。

まさに、いいことばかりの暗唱です。

## 百人一首大会に向けて

3学期が始まると、教室から百人一首を読み上げる声が聞こえてくるようになりました。1月27日(土)の学校公開日に行われる百人一首大会に向けた練習風景です。

以下、その大会を間近に控えた児童朝礼の一幕を紹介します。

#####

「校長先生が上の句を言いますから、下の句が言える人は言ってごらん下さい。」と言って上の句を告げて行きました。

「過ぎて～夏来にけらし白妙の～」と上の句を読み上げると、「衣干すてふ～天の香具山～」と朗々とした声が返ってきます。

さすが月田小の子どもたちです。嬉しくなって次々と読み上げて行きます。

「天つ風～雲の通ひ路吹きとちよ～」

「秋の田の～かりほの庵のとまをあらみ～」

「足曳の～山鳥の尾のしだり尾の～」

私の唱える上の句のリズムに合わせて、子どもたちの頭がかすかに上下しています。そして、どの歌に対しても、見事に下の句を唱えるのです。

ちなみに、百人一首で早く札を取りたいと思えば、決まり字を覚えることです。一文字を読まれただけで取ることでできる札があります。全部で7枚。「む」「す」「め」「ふ」「さ」「ほ」「せ」の音ではじまる歌は、百人一首に一首しかありません。

次に、「一字決まりの札」を取り上げました。

「む…下の句が言える人？」と聞くと、何と「霧立ちのぼる秋の夕暮れ」と言える子がいるのです。

同様にして他の一字決まりを言わせました。目を見張る活躍をしたのは低学年でした。1～2年生でも高学年と対等に答えることができます。

最後にクイズを3問出しました。

「百人一首のなかに登場するのは次のどれか？」

①サル ②イヌ ③シカ……解】③

「百人一首の中で一番よく登場するのはどれ？」

①月 ②星 ③太陽……解】①

「夜明けのことを、昔は何といったのか？」

①朝はやく ②朝いちばん ③朝ぼらけ…解】③  
#####  
子どもたちは、さも当たり前のように簡単に答えてしまいます。

「鉄は熱いうちに打て」という諺があるように、子どもたちにこそ、百人一首等の名文・詩文にどっぷりと浸らせたいと私は願っています。

平成25年度から月田奨学会より新入生に対し「五色百人一首」のカルタがプレゼントされています。

こんな有り難い環境は、他の学校ではあり得ません。このような下地もあり、百人一首への取り組みが年々盛んになっています。

土曜日の学校公開では、2校時め、全校生徒による百人一首大会があります。期待してください。



## 認知症サポーター養成講座

1月17日(水)、6年生が「認知症サポーター養成講座」を受けました。

昨年に続き、講師は、学区のキャラバンメイトの方々です。

認知症は、脳の病気です。

誰にでもなる可能性のある病気です。

講座では、認知症の方にどのように接したら良いのか悪いのかを、具体的な事例を元に学習することができました。



寸劇：迷子になったおばあさんに声をかけるユウマ君

講座は、クイズに寸劇、そして朗読ありと変化に富んだ内容で、分かりやすく教えてくださいました。

最後に、「認知症サポーター」として認定されました。その証として、オレンジリングが子どもたちに贈呈されました。

以下に、子どもたちの感想の一部を紹介します。

◎認知症の人たちにも、やさしくして、もし何度同じ事を聞いてきても平常心を持ち続け、話しを少し違う方向にしてみると、認知症の人がうれしくなることが分かりました。もし認知症の人がいたり、見かけたりしたら、やさしく接しようと感じました。認知症の人には、会った時には、前で、やさしく「こんにちは」と言って最後まで聞こうと思います。(カゲ ヨシキ)

◎認知症の人にあったらやさしく声をかけてあげようと思う。認知症の人に強い口調で言うてはいけないと思った。認知症の人が何度も聞いても、ちゃんと一言一言答えようと思った。

(マツオ タクミ)